

平成19年8月17日

平成19年度 教師海外研修(ネパールコース)研修報告書学校名 愛媛県東温市立川内中学校担当教科 英語氏名 榎 裕美子**1. 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点**

今回の研修では、ネパールと日本の違い、共通点を探すことに主眼をおいた。ネパールでは、日常生活、教育、文化などあらゆる面において日本との違いが見られた。

まず、衣・食・住の環境の違いに驚き、日常生活の中で、私たちが普段何気なく使っている水がどれほど大切なものかということがよくわかった。

次に、日本では中学校を卒業するまで国民全員が教育を受ける権利を持っているが、ネパールでは教育を受けたくても受けられない子どもたちがいるという現実を目の当たりにした。特に、貧富の差が教育に与える影響は大きい。裕福な家庭の子どもたちは私立学校へ通い、外国へ留学することもある。一方、公立学校では、資金難のため教室に窓や電気がない、教科書や文具がそろわないということもめずらしくない。その上、子どもが家計を支え、貴重な労働力となる家庭では、まともに学校へ通うことすらできない。ネパールの教育事情は日本と全く異なり、さまざまな課題をかかえているということを実感した。しかし、さまざまな課題をかかえているという点では日本も同じである。教育の大切さはどこへ行っても変わらない。適切な教育が国の将来を支えるといっても過言ではないと感じた。

2. 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

視察を通して参考になったことはたくさんあるが、その中でも国際協力を行う人々の姿を実際に見ることができ、よかったと思う。現地の学校や農園、印刷所などで、青年海外協力隊員やシニアボランティアとして多くの日本人が活躍しているということに感動した。また、人々の生活を支える水を供給する水道局でも、日本人の貢献を見ることができた。日本とは全く異なる環境の中、現地の人々と協力しながら少しでも現状をよりよくしようと努力する姿に出会い、大きな刺激を受けることができた。

この視察を通して、印象に残った言葉がある。「適正技術」、そして「人を動かそうと思ったら、自分が感じて自分が動いて見せることだ」という言葉である。日本の高度な技術が開発途上国でもそのまま通用するとは限らない。その国が必要としている技術をきちんと見極め、現地の人々が継続して運営できる形で伝えなければいけないということがわかった。また、現地の人々の間に浸透している考えや習慣を急に変えることは難しい。国際協力とは、いっしょに汗を流しながら、少しずつよりよい方向へ導いていくという息の長い活動であると感じた。

疑問に思ったことは、JICAの支援する学校や農園などはどのように決定されるのか、ということである。通訳をしている現地の方から、カトマンズ盆地内と他の地域とでは生活や教育の差が激しいという話を聞いた。安全が確保される範囲内で、援助したことが成果となってかえってくる場所が選ばれるのは当然だと思うが、本当に支援が必要なのに手が差し伸べられないことは残念だと思った。これからは、地域のリーダーとして周囲を引っ張っていけるような人材の育成も重要な課題のひとつであると感じた。

これまで紙面でしか知らなかったJICAの活動を間近で見ることができ、とても貴重な経験になった。

3. 教育指導への活用について

今回の研修で視察し、感じてきたことをできるだけ多く生徒に伝えたい。まず、日本とネパールとの違いや共通点を通して異文化理解を図ることである。1日2食の食生活、トイレの習慣、宗教に対する人々の思い、交通事情など、自分の目で見て驚いたことを率直に伝えていきたい。次に、教育を受けたくても受けられない子どもたちがいるという現実を通して、今の自分たちは何をしなければいけないのか、ネパールや開発途上国の人々のために自分たちにできることは何か、真剣に考えさせたい。

2学期以降の指導の前に、生徒の実態や思考の流れに配慮して、綿密な計画を立てておきたい。そして、体験的な活動を取り入れたり、映像を効果的に活用したりするなど、指導の工夫を図りたい。

生徒たちの視野を広げ、国際協力のあり方をきちんと伝えることができるよう、今回の研修で学んだことを今後の教育活動に生かしていきたいと考える。

資料2-2

4. 研修に関する全般的な所感／意見について

私にとって、この研修はとても意義深いものだった。全体を通して、新たな発見をたくさんすることができ、自分自身の視野を広げることができた。

特に印象に残ったのは、教育現場でのたくさんの出会いである。人なつっこい笑顔で手を振る子どもたち、ネパールの子どものために一生懸命活動する先生や協力隊員の方々との出会いは、私に大きな刺激を与えてくれた。ある学校で子どもたちに「将来は何になりたいか」、「今いちばんほしいものは何か」という質問をした。子どもたちは目を輝かせながら、将来の夢を語り、今いちばんほしいもの、大切なものは“教育”であると声をそろえて答えた。ぜひ日本の生徒たちにも伝えたいと思った。そして、隊員の方から「いちばん大変だと思うことは、家庭の事情で学校に行けない子どもたちがいるということで、一人の力ではどうにもできない。でも、ネパールで生活してみてもはじめてわかったことがたくさんあり、ここへ来て本当に良かった。」という話を聞いたとき、胸が熱くなるような思いがした。

また、隊員の方が現地言葉を使って、上手にコミュニケーションをとっていたことにも驚いた。短い訓練期間で身につけた言葉が、生きた言葉としてしっかり活用され、協力活動をより一層充実したものに行っているように感じた。母国語以外の言語を身に付けることによって、自分の世界が大きく広がり、自分ができることがふえていくということを実感した。英語の学習に意欲的になれない生徒に対しても、今回の経験を踏まえながら、世界の共通語である英語を身に付けることの大切さを話したいと思った。

研修の間、ホームステイ中を除いて毎晩ミーティングを行ったことも思い出深い。その日体験したことをどのように感じたか、自分の思いを素直に語ることでできる雰囲気がとてもよかった。同じ教員という立場でありながら、さまざまな意見や感じ方があるということを再認識し、今回の研修をどのようにして指導に生かしていくのか、たくさんのヒントを得ることができた。同じ目的を持った仲間とは、かけがいのない存在である。今回の研修に参加した先生方、JICAやJOCAの方々との出会いをこれからも大切にしていきたい。

最後に、研修中ずっと感じていたことは、日本とは比較にならないほどの国内での生活の格差である。その陰にあるのは、今でも根強く残っているカースト制度ではないだろうか。日本でも人権を侵害する大きな問題のひとつとして同和問題があげられる。このような人権問題を解消するのも、教育の果たすべき役割のひとつであると思う。平等な人間として生きる権利が守られる世界になってほしいと願う。

5. JICA四国に対する要望・提言

準備の段階から細かく丁寧な対応をしてくださり、本当にありがとうございました。

事前研修では、昨年度研修に参加した先生から話を聞くことで大まかなイメージを持つことができ、お土産や資料(名刺作り)の準備にも役立った。またネパールで協力隊員として活動した方からのアドバイスも参考になり、よかったと思う。

スケジュールについては、1日に4つの学校訪問をするというところがたいへんだった。条件の違う4つの学校で子どもや先生方と交流する機会を作ってくださったことはたいへんありがたいと思う。4校を視察できたことで、カトマンズ盆地内の公立学校と言ってもさまざまな違いがあることがわかった。しかし、移動距離があり、交通事情もよくないため、体力的にも疲れを感じた先生が多かったのではないだろうか。(現

地の学校の要望でということだったので仕方ないと思いますが…。)

一人ずつ2泊3日のホームステイをさせてもらったこともうれしかった。家族の役割や実際の生活の一部を垣間見ることができ、貴重な体験ができた。

6. 今後の本研修参加者へのアドバイス

研修直前は1学期の成績処理もあり、たいへん忙しい時期です。私は夏休み中も部活動があったので、準備をしたのは本当に短い期間でした。その際、研修に参加する先生方とメーリングリストを通して情報交換をしたことが役立ちました。個人で準備したものは「名刺」と「ホームステイ先へのお土産(うちわ、折り紙、お手玉などを100円ショップで購入)・自己紹介用のプロフィール」です。パソコンに堪能な方がネパール語フォントをダウンロード、使い方を解説してくださり、ネパール語の文字を入れて名刺を作成しました。できれば現地の言葉で自己紹介したり簡単な会話をしたりできるよう予習していくといいと思います。※旅の指さし会話帳「情報センター出版」がおすすめです。訪問先で、突然自己紹介を…ということもあったので。学校などの訪問先へは子どもたちの習字・絵などの作品や出発前に大阪の100円ショップで購入した置物が喜ばれました。よさこい踊りを練習し、披露したところもありました。そこでは、鳴子をおみやげに置いていきました。

実際に研修に参加するまでは、なかなか実感がわかないと思いますが、積極的に体験することが大切だと思いました。見て、聞いて、触って、食べて…せつかくのチャンスです。危険なこと以外なら何にでもチャレンジしてみてください。

また、この研修に参加する先生方と情報を共有し、意見交換することが大切だと思います。私たちのグループは毎晩反省会を行いました。日本とは全く違う環境の中、何もかもが新鮮なことで、時間や気持ちにも余裕がないまま日程が過ぎていくような感じです。1日の終わりに反省会をもち、お互いの意見交換、発見したことを伝え合いました。一人では気づかないことに気づかせてもらったり、困ったときには手助けをしてもらったり、仲間って本当に大切だと思いました。

資料2-3

7. 各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと⇒それを何につなげるか？ その他所感
7/30 午後	JICA事務所	所長さんのあいさつ、安全対策について、そしてネパール語研修があった。 体調管理をするためには、まず水に気をつけなければならないというお話を聞いて、日本では何気なく使っている水の大切さがよくわかった。 ネパール語研修では、現地の通訳さんも加わり、ペアと協力して練習することができた。現地の言葉を使って、自己紹介や簡単な会話ができるようになると、とてもうれしかった。積極的に交流するためには、少しでも多く現地の言葉を覚えたいと思った。国際協力の現場では、現地の言葉の習得も必要不可欠な要素であると感じた。
7/31 午前	JICA事務所	JICAが実際にどのような活動をおこなっているのか、概要を知ることができた。近年、ネパールでは民族紛争が起き、治安が安定していない。紛争の原因となる貧困の格差を解消するためにも教育に重点をおき、活動を進めている。しかし、カトマンズ盆地外の山間部では、情勢が不安定なため支援活動を行うことができない。教育がきちんと行われないために悪循環が繰り返されるのは悲しいと思った。

		どこへ行っても教育の大切さは変わらない。教育を受けたくても受けられない子どもたちがいるという現実を日本の子どもたちにも伝えたい。
7/31 午後	カリキュラム開発センター 国立教育開発センター	ネパールでは教員になるための資格を取る必要がなく、SLCというテストに合格すれば教員として働くことができるということに驚いた。現在は、約10ヶ月の教員トレーニングが行われるようになっているが、全員がこのトレーニングを受けているわけではない。また、本来なら重視されるべき初等学校の入門期の教育活動が軽視されているような気がした。よりよい教育を実践していくためには教員の意識改革や制度の見直しが必要であると感じた。
7/31 午後	ジャナック教材開発センター 印刷工場	日本や諸外国からの支援を受け、教科書を作成しているが、まだ国全体の需要を満たすことはできていない。印刷工場でシニアボランティアとして活動している鈴木さんは、ネパールの人は日本ですぐに取り替えてしまうような部品でも根気よく修理して使っているということに感心していた。私たちが“ものを大切にする”という姿勢を見習わなければならないと思った。
8/1	ナバジヨティ初等学校	最初に訪問した学校で、ナマステ体操を体験した。楽しそうに体を動かす子どもたちの笑顔が印象的だった。その後、よさこい踊りを披露した。子どもたちは鳴子に興味を持ち、踊りが終わると鳴子を試して喜んだ。 教室には電気や窓ガラスがない。一人一人の机やいすもなく、勉強に集中できる環境ではなかったが、授業では、熱心に話を聞いたり、問題を解いたりしている姿が見られた。とても活気のある学校だった。
	プルチヨーキ初等学校	最初の学校よりも山の方にある学校だった。学校の敷地がせまく斜面に面しているため、校舎は2つに分かれていた。校舎を行き来する時も、狭くぬかるんだ道を通らなければならなかった。ここで、驚いたのはパソコンが置かれていたことである。アメリカの団体から寄贈されたものらしいが、使用できない状態だった。電気の配線が何か根本的なことが問題になっているようだった。教育現場においても、「適正技術」の大切さを知った。
	パタチャップ初等学校	4つの学校の中で一番山の中にある学校だった。ここでは、政府から配当される学校運営資金の中から、子どもたちのために昼食を提供しており、試食をさせてもらった。日本の給食と比べると、とても質素なものだったが、学校は子どもたちのために努力しているのだと思った。校長先生は、算数の力を伸ばすことにも力を入れていた。以前は教育に対してあまり熱意のある方ではなかったと聞いてさらに驚いた。このような人材育成が少しでも多く現地に根付いていけばいいと思った。

	シッデシヨール初等学校	<p>最後に訪問した学校で、子どもたちに質問したり、先生方と意見交換をしたりした。子どもたちに「今一番ほしいものは何か」と聞いたとき、全員が「教育」と答えたのに驚き、感動した。日本の教育が見失ってしまったものがここにはあるような気がした。先生方の意見も興味深かった。ネパールの先生にも私たちと同じような悩みがあるとわかったとき、親近感を持つことができた。</p>
	4つの学校見学を終えて	<p>1日で訪問した4つの学校はそれぞれ異なる条件の下、教育活動を進めていた。どの学校へ行っても同じだったのは子どもたちの温かい笑顔である。いつも笑顔を決やさず、キラキラと輝く目が印象的だった。この感動をいつまでも忘れたくないと思った。また、道具や環境に恵まれないながらも工夫して頑張っている先生に出会い、前日訪れた中央機関と現場との意識のずれを感じた。うまく連携ができればいいと思う。</p> <p>日本とネパールの教育の違いを通して、自分たちがやらなければならないことを真剣に考えさせたい。</p>
8/2	マノハラ浄水場 町中の公共水場	<p>ネパールでは慢性的な水不足が深刻な社会問題のひとつである。国民にとっては切実な問題であるはずだが、行政の都合でなかなか計画が進まないという現実を知った。日本では当たり前前に口にしている水の大切さが本当によくわかった。愛媛でも毎年夏になると、水不足の問題が取り上げられる。水不足を解消するために、自分たちにもできることを考えさせたいと思った。</p> <p>町中の公共水場を見学していたとき、ある老夫婦から話を聞くことができた。以前は村に住んでいたが、マオイストによって住む家を奪われ、カトマンズに出てきた。本当は村に帰りたいが家もなくなってしまって、どうしようもない。水道がないので1日に数回水汲みに来ているという話だった。とても衝撃的だった。それまではJICAの方から説明を受けただけだったが、ネパールが現在かかえている問題の深刻さを知ることができたような気がした。</p>
8/3	非正規教育クラス見学	<p>ネパールには、教育を受けられない子どもたちがいる。近くに学校がない、カーストのため学校に行っても侮蔑・差別される、経済的に困難なため、親や地域の人でも学校に行っていないからなど、理由はさまざまである。このような人々(大人も含めて)のために教育を行っているのが非正規教育プロジェクトである。</p> <p>学校で教育を受けられない子どもたちの通う教室を見学した。となりにには孤児院があった。子どもたちを学校に通わせなければならないということ、親や地域の人々に指導しなければならないという話を聞いた。この現実をどのように伝えればいいのか、自分なりに考えたい。</p>

<p>8/5</p>	<p>ホームステイ先で 学校訪問 L.I.INTERNATIONAL SCHOOL</p>	<p>ホームステイ先で、カトマンズ市内にある私立学校の訪問をさせてもらった。前に訪れた公立の4つの学校と比べて、驚いたことがたくさんあった。幼稚園から高校まで一貫した学校で、生徒数は1800人。施設はきれいに整い、図書室やコンピュータ室もそろっていた。校長室では、すべての教室の様子がモニターに映され、何かあればすぐに対応できるそうだ。公立学校との違いは何なのだろうと思った。</p> <p>次にまた別の公立学校に連れて行ってもらった。ここで驚いたのは、施設や設備は前に訪れた公立学校とほぼ同じだったが、教育の内容が全く違っていたことである。進級試験は100%の合格率で、授業はどの教科も英語で行われていた。地域でも人気が高く、1つの教室に生徒が70人入っている状態だった。</p> <p>ネパールでは、私立学校の方が教育の質が高く、私立学校へ通わせたいと思う親が多いという話を聞いていたが、素晴らしい公立学校も見ることができてよかった。先生の熱意によって、学校には大きく変わる可能性があるのだと思った。</p>
<p>8/6</p>	<p>農場見学</p>	<p>2つの農場を見学した。1つは、質よりも量を重視し、たくさん種類を植えてしまった農園。農園でとれた梨やキュウリを出してもてなしてくれたのがうれしかった。もう1つは、外国客に販売することを目的に日本の栽培技術を取り入れ、梨を生産する農園。ここでも梨を試食させてもらったが、味の違いは歴然としていた。土地の広さや条件も違っていたが、考え方の違いで収入も大きく変わるということがわかった。また2つ目の農園のように生産したとしても独自に販売ルートを作り、毎日町のスーパーマーケットまでバイクで販売しに行かなければならないという販売面での課題も残る。改めて支援の難しさを感じた。</p>